

図書館だより

'84.6

故人との約束

川勝 正治 (生物学)

目 次	
故人との約束	
川勝 正治……1	
つぶやき一閲覧室から	
ぶらうじんぐるーむ……2	
資料紹介……3	
図書館をあなたのものに	
新学期を迎えて	
宇山 銚子ほか	4～9
海外記	
ちよっと見のブラジル	
青木 正次……10	
NEWS ……12	

私の姓は、北海道ではなじみがなく、よくカワカチと読み違えられる。川勝姓は丹波の亀岡市旭町（旧南桑田郡）の美濃田・杉と、船井郡八木町の屋賀・青戸に60～70軒ほどもあろうか。大堰川北岸の農村地域である。ただ、明治前からこの姓を持つ旧家は数軒かと思う。こういう家では門・母屋・倉、それに間取りや庭の配置までがよく似ている。

川勝家文書は幕末の外国奉行近江守広道が所蔵していた外交機密文書類で、昭和5年に刊行された。系譜では、嫡祖広綱（寛文元年没）は秦姓の大連川勝広隆卿の裔と記し、その父秀氏は関ヶ原戦後の処置で、丹波内一万石を没収されている。アーネスト・サトウの日記抄（萩原訳）に、“川勝家はもともと徳川の家臣ではなく、徳川よりも古い家柄だそうである”とあるのは、この系譜を指している。私は子孫の方達のことを知らない。

天使短大の教授であった川勝勝様（故人）とは同姓のよしみで親しくさせていただいた。先生は晩年ルーツ探しに興味を持たれ、私も少しお手伝いした。宮城県泉市の御宅に伝わる系図は帰化人功満王に始まり、江戸初期で終わっていて、書家の手になるものであった。ただ、広隆卿の二男の系譜（桐紋と釘抜紋）である点が注目された。丹波の親戚の系図は、なんと始皇帝のはるかな祖から書き起し、広綱の三男の系譜にしつらえてあり、江戸中期までである。私宅のそれは、龜山大守普沼氏の徒の衆を引退した川勝治部（立葵紋）を祖とし、代々の当主らが書き継いでいて、故人の法名も誌されており、元禄前の位牌も残っている。

川勝政太郎氏（サンスクリット学）と川勝義雄氏（六朝史）は姻族でないが、何かうかがってみようと思つていうちに、相ついで他界されてしまった。川勝傳氏は母方の近い姻戚で、

先般、“秦河勝”という本をいただいた。

勝様は私と川勝姓の記録をまとめておきたいとお気持であった。約束を違えたお詫びと共に、この小文を捧げて故人のご冥福を祈りたい。

つぶやき — 閲覧室から —

新刊書が読まれている。それも、現在、活躍している作家の作品が多いように思われる。

丸谷才一はあるエッセイのなかで「新刊書には、殊に新刊小説には、そのときの具体的な状況のなかで生きる人間の息づかいがちかに入れてある……」と、述べているが、最近の学生の読書傾向をみると、同時代のそれもあまり距離感のない現実味のある作品が好まれているようである。それらは小説の類にとどまらず、さまざまな対象へと向けられる。コンピューター関係のものであったり、迷宮、冥界、そして宇宙への知的な遊びであったりする。イラストをふんだんに使ったファッション、インテリア、

料理、旅行などなど、そして就職関係などと…。

ここ2、3年の目立った現象として、北海道出身作家の作品がつきつぎと読まれていることと、女性によって書かれたもの、女性を扱った作品に人気集中していることである。一方、フランス文学、ドイツ文学はいうにおよばず、広大なロマンを扱ったロシア文学などの作品がかったの栄光を秘めて今はただひたすら窓ぎわ族といったところである。

4月、新入生の季節である「ランボーの本を読みたいのですが……」という問いかけに、ある戸惑いを感じるのは古典、名著の類が最近あまり利用されなくなったからである。何らかの読書体験のはじまりをまのあたりにして、不安と期待のないませの昨今ではある。

ぶらうじんぐるゝむ

卒論を書くにあたって

笠原あけみ（昭和57年度英文学科卒業）

卒論にはアメリカ・ニューイングランドの詩人ロバート・フロストを選びました。資料収集にあたって利用した資料や、予備知識を得るために参考としたものなどを簡単にあげます。

まず作家に関してどんな研究書が出されているかを知るために **American Literary Scholarship** を引きました。作家についての回想録や批評などの出版事項を知ることができ、便利であったと思います。雑誌記事論文については **Annual Bibliography of English Language and Literature** を引くとどのような論文記事があるか、わかると思います。初めは、どんな研究書を求めるとよいか戸惑うもの。早めに、これらを見て、資料収集の参考とするいいでしょう。

次に文学史的観点から作家像を把握するため、**Literary History of the United States** や文学辞典の類を見ました。同時代の作家たちと比較することができ、役に立ったと思います。また詩の中に出てきた動・植物などについては英語歳時記や英米風物資料辞典などから、それらがどう受け入れられているかを知り風俗・習慣の違いに驚かされることもしばしばありました。文学と切り離すことのできない宗教については勉強不足であったので、作品を理解するうえでも奥深いところまで掘り下げることができなかったかもしれません。図書館には多くの宗教に関する本があります。普段から少しずつでも接したいものです。ここにあげた資料は図書館にあるものですので出版社等省略しましたが、係の人に聞くともっと多くの参考図書についても詳しく説明して下さると思います。

資料紹介

The Mississippi Quarterly :

The Journal of Southern Culture

Mississippi State University

Reprint, University Microfilms International

所蔵 創刊号—32巻 (1948—79年)

アメリカ南部出身の作家というとハックルベリー・フィンやトム・ソーヤーの冒険物語などを書いたM. トウェインを初めとしてW. フォークナー、K. A. ポーター、R. P. ウォレン、A. テイトなどがすぐ連想される。これらの文学者は卒論などの研究対象にもよくとりあげられるが、その際の基本資料のひとつが、この程図書館の所蔵となった。

The Mississippi Quarterly がそれで、同誌はアメリカン・スタディズ、とりわけ南部研究に欠かすことのできない重要文献である。創刊当初の内容は、ミシシッピ州立大学の The Social Science Round Table での研究発表論文の報告を中心とし、The Social Science News Bulletin という誌名であったが、7巻以降、現誌名に変更、現在も刊行中である。かつての南部産業の中心である綿花関係の論文や、南部社会の歴史的動向を知るうえで重要な論文が多い。季刊誌となつてからは、文学関係の論文も目につき始め、今ではむしろ、こちらの方に重点が置かれているともいえる。先にあげた作家の他にも、「南部のクーバー」と称されるW. G. シムズや、詩・小説・批評において後世に大きな影響を与えたE. A. ポーなどについての論文も多く、女流作家E. グラスゴー、E. ウェルティやF. オコナーなどについても特集が組まれたりしている。

また、同誌の特色のひとつとしてあげられるのは、フォークナー研究である。フォークナーがかつてミシシッピ大学に在籍していたという事情からも、当然であろうが、とにかく、各

巻に掲載されているフォークナー関係の記事の多さに圧倒される。この分野の第一人者であるJ. B. メリウェザーの編集で、14巻以降32巻まで、毎巻第3号をフォークナー特集としているのを見ても、その力の入れようがわかるであろう。それらの精髓は、同氏の手でA Faulkner Miscellany (Univ. Press of Mississippi 1974) として刊行された。

(図書館にあり。請求記号A933.5—F16m)

さらに The Fugitive 誌を発行して南部擁護に立ちあがったA. テイト、J. C. ランサム、P. R. ウォレン、C. ブルックなどの作家についても、この雑誌によって知られるところが多い。また、南部といえば、黒人問題をさけて通ることはできない。R. ライトを初めとする現代黒人作家に関する論文や書誌事項が盛られていることも、見逃せない点であろう。

12巻以後、index を各巻に付し、22巻より各巻第2号に A Checklist of Scholarship on Southern Literature を載せている。この度図書館に購入されたものは、マイクロフィルムからの複製のため、判読しづらい部分も少しあり、装丁もあまり立派ではない。しかしアメリカ南部研究には欠かせない貴重で重要な資料であることは確かである。



図書館をあなたのものに

新学期を迎えて — 読書特集 —

前号のアンケート調査に寄せられた要望の一つに応じて読書特集を企画しました。新学期を迎えて、諸先生方からより豊かな学生生活を過ごすために“必読書”と“最近お読みになられて印象深かった本”を紹介していただきました。各分野から照射された本は、大部分を図書館で所蔵しています。さっそく利用して下さい。



宇山 銚子 (理事長・保育学)

樹々は時ならぬ雪に重そうに枝をたわめている。大学の入学式も明日、学生生活を豊かにするために何冊かの本を紹介してほしい、という図書館からの宿題を思い出してペンをとった。30年以上修道生活を送っているのに、読書の範囲は広くはないが、感動して読んだものを何冊か紹介したいと思う。

周郷博著作集 全6巻 柏樹社

1907年に千葉県に生まれ、一高を経て東大に学んだ周郷氏は、戦後お茶の水女子大学教育学部の教授となり、1969年からは附属幼稚園の園長も兼任している。1973年退職、その後名誉教授となり、1986年逝去された。教育の詩人といわれる周郷氏は、晩年丹沢の里で半農半学の生活を送られている。ティヤール・ド・シャルダンの思想に深く影響された周郷氏の宇宙的な広く、高く、豊かな知性が、文章のあちこちに珠玉のようにちりばめられ、読者の心に文明や教育の災害を超えて光をみるような感動を与えてくれる。

人間らしき進化のための教育 マリオ・M・モンテッソーリ著 周郷博訳 ナツメ社

マリア・モンテッソーリのとなえた独創的で又革命的な教育を理解するために、孫のマリオ・M・モンテッソーリ氏の書いた本で、普通の学術書のような固苦しさがない上に、どの章から読み始めても、まとまった何かを学びとるこ

とができる。コスミックな視点に立ったモンテッソーリ女史の教育観のスケールの大きさに魅せられる。又モンテッソーリ女史のよき理解者である著者の文章から人間と教育について啓発されたことが多い。周郷氏の訳もよいのだと思う。

北海道植物教材図鑑—野の花—、北海道植物
図鑑—続・野の花— 谷口弘一・三上日出
夫編 北海道新聞社

小・中学校の教材として長年の研究の成果がまとめられたこの野草ハンドブックは、美しいだけでなく、見ていくうちにその野草の形態的、生態的特徴が自然に学びとれるよい本である。北海道にとって、もっともなじみ深い植物の正しい名まえを覚えることによって自然に対する親しみを増し、人間と共存する自然界の豊かさや秩序そして調和と驚きをもって深く感じることができる。これからの美しい季節に、野外散策のよき伴侶になると思う。

人間の大地 犬養道子著 中央公論社
国連をはじめ、多くの国際的な機関の公の資料に基づいた、人類と地球の将来を憂う愛に溢れた本だと思う。読書中に本から目を離し、じっと難民の痛みを思うこともしばしばだった。人類連帯の立場に立ち、隣人のためによることで働くことのできる女性として成長するために、ぜひ読んでほしい本である。

石井よう子(調理学)

いつか「私作る人、ボク食べる人」というのが話題になったことがありました。どちらが作ろうと食べようとそのことを問題にしようとは思わない。今は食べる物も〇〇で買ってくればいい生活になってきている。食生活は少くとも量的には豊かになったし、食を楽しむ時代でもある。が一方で食卓の不安も少くない。そんな中であって改めて料理する心とは何なのかを問い詰める必要があるのではないだろうか。古典的な名著の中から次のものを推薦しておく。(いずれも訳本であるが原典にふれる意欲があるなら結構である)

美味礼讃 上・下 ブリヤニサバラン著
岩波書店 関根秀雄、戸部松実訳

周知のとおり著者は司法官、政治家としてよりもフランスの食通として有名。(ケーキ好きの人にはおなじみのサバラン) 原題は味覚の生理学であるが生理学でも栄養学でも調理の本でもなくむしろ食味の精神を説いたもの。簡潔な名文でおもしろい。

随園食单 袁 枚著

西のサバランに対し東の代表的食通、袁枚(人々は随園と呼んだ)による料理メモ。作る人食べる人の心得と中国料理、食品の解説からなる。数種の日本語訳が出ているが中山時子監訳 柴田書店が親しみやすい。

作る心食べる心(典座教訓、赴粥飯法、正法眼蔵示庫院文) 第一出版、中村璋八、石川力山、中村信幸訳著

道元が禅の修業道場における「典座(食事係)」の職責と食事に関する作法を説いたもの。単なる精神論でもなく実務的なことにもふれている。一項目ごとに訳註つきでわかりやすい。

家政科の学生にも趣味は「読書」と書いている読書家? が実に多いが、図書館の利用は少ないと聞く。勿論文学作品も含め多くの本を読むことは家政学の裏づけとなるはず。

奥山わか子(教育心理学)

一少女の成長を見る—教育心理学的考察—
津留宏著 秀英出版 昭26

一人の一見目立たないが、かなり個性的な少女の成長発達経過をたどり、あわせて環境的教育的問題を論じている。

「この書は青年たちには心の友として、教師や親たちには成長の一事例として、広く心の発達に関心をもたれる人々に読んでいただきたいと思う」(著者あとがき)

夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録—
フランクフルト著作集1 霜山徳爾訳 みすず書房
人間と成る、自分自身と成るということは一人ひとりにとっての生涯の課題であると思う。強制収容所という限界状況におかれた一心理学者の体験を通して、人間と成るということの真の意味を深く考えさせられる書。

克服の心理学 黒田正典著 協同出版 昭42
経験から学ぶために必要なことは、この本質をみつめる眼—心の眼を明らかにすることであろう。この書はさまざまな心の眼、いいかえればさまざまな経験のあり方を描きだしたものである。

性格の心理 正木正著 金子書房 昭38
簡単には読みとおすことのできない内容であるが、本文を読み深めてゆくと、「心理や教育の専門家でない人でも、広く人間のことに關心をもつ人たちは、特に自分が人間であることに苦しみと喜びをもつ人たちは、本書を読むうちに必ずはっと目ざまされる思いにうたれる」(序)という恵まれた体験をもつかも知れないという期待をこめて……。

一本の樫の木—淀橋の家の人々— 関屋綾子著 日本基督教団出版局 1982

一つの家庭の歴史を通して、一人の人格の核になるものは、とらえがたいほどの広がり深い根をもっているものだという印象づけられた。

新岡 利朗 (英語学)

"Salad days" — この言葉から、あなたはどのようなイメージを描かれますか。Cleopatra は、Antony and Cleopatra の中で、次のように嘆きます。My Salad days, / When I was green in judgment, / cold in blood / To say as I said then. / (I. v. 73-5) (それはまだ私が青っぱいころの話。あの時分は物を見る眼がなかったし、情も湧かなかったのね、そんなことを言うなんて! <小津訳>) 350年程も前の Shakespeare の言葉ですが何と新鮮に響くことでしょうか。現在も、「無経験な青二才の時代」の意味で生きています。しかし1623年の最初の刊本は My Salad dayes, / When I was greene in iudgement, ... です。言葉は綴りだけでなく、時には意味や発音も変わるものなのです。

Salad という語は、Salary 「ローマの兵士が塩を買うために与えられたお金」と同じラテン語の sal 'salt' が語源です。green は grass とともに grow と関係のある語です。

言語による色の分類法も興味のあるテーマですが、green は、「青二才」の意味にあたります。

古い時代の英語・意味論・語源・他言語との比較・英語の変種・文法(従来の学校文法とは全く異なった観点から研究されるようになってきました)・英語教育等々、英語学は広い領域を含みます。このような広い世界を旅する適切な入門書が残念ながら多くはありません。私はまず語源の載っている立派な大きな辞書を求めることをお勧めします。疲れたら枕にできる程の辞書です。読んで新しい発見をノートに書き留めて下さい。他に鈴木孝夫著 ことばと文化 岩波新書、日英語比較講座 全5巻 大修館、現代の英語教育 全12巻 研究社 などで慣れた後、興味のある分野のものを読むようにするのが良いでしょう。

最近読んだものではありませんが、犬養道子

の花々と星々ととマーチン街日記(ともに中公文庫)は、一人の女性の羨ましい半生を表していると思います。

三浦 良一 (育児学)

新学期に向けての学生の必読書を紹介せよとの図書館からの要望であるが、私にとっては、教科書以外に読まねばならない本というと、すぐには思いつかないのが現状である。私が学生であれば、あまり忙しくない新学期のうちに、文学とか哲学の本を読みあさりたいところだが、今の女子学生の好みも判らないし、最近では専門書以外では肩のこらないものしか読まないで、必読書などと指定はできない。学生自ら図書館に行き、自分の好きなジャンルのものを探した方が良いでしょう。ただ私の所属する家政科の学生のうち2年生には多少ともためになるものとしてすすみたいものがある。

アルビン・トフラー著 第三の波 日本放送出版協会 今、世界には人類がかつて経験したことのない大変革が進行している。トフラーはこの大変革を、第二の波、産業革命の変化にくらべてはるかに強い第三の波であると指摘し、巧みに説明している。これからの社会をみる上で大いに参考になるであろう。

岩男寿美子 原ひろ子著 女性学ことはじめ 講談社現代新書 男性中心で働いてきた社会を、女性の視点から捉え直すために「女性学」が提唱された。未来の主婦としての生き方に目覚めても良いであろう。

八木あき子著 ドイツ婦人の家庭学 新潮社 いわゆるウーマンリヴの時代になっても、家庭を守ることは大事なことであるが、この点ドイツ婦人の家庭生活は、伝統的、科学的面でも見習うべきことが多いと思われる。

最近特に印象に残る本は読んでいないが、戸板康二著 ちよっといい話 文春文庫 を統編も合わせて楽しんで読んでいる。明治から現代までのいろいろな人物にまつわる話であるが、

特に芝居の関係者の話が面白い。演劇評論家であるからだろうが、作家でもある著者の文章がたまたま好きだからでもある。

近野 亘 (宗教学)

ヨーロッパ中世を暗黒時代とする歴史観は、かなり見直されています。中世をカットして本来語れないものがたくさんあります。「大学」「修道院」は「文化」の典型です。今回は、宗教学Ⅲ(思想史・近野)に関するもので、読みやすく内容のあるものを少し紹介しておきます。

西欧精神の探求一革新の十二世紀一

堀米庸三編 日本放送出版協会

修道院 世界史研究双書7

今野国雄著 近藤出版社 (岩波新書も有る)

中世の大学 ジャック・ヴェルジェ著

大高順雄訳 みすず書房

中世の秋 ヨハン・ホイジンガ著

兼岩正夫・里見元一郎訳 創文社

中世ヒューマンイズムと文芸復興

エティエンヌ・ジルソン著 佐藤輝雄訳

めいせい社

中世哲学の精神 上・下 エティエンヌ・ジルソン著

服部英次郎訳 筑摩書房

中世のキリスト教と文化 C・ドウソン著

野口啓祐訳 新泉社

全集・著作集等が多く出されていますが、いつまでも大切に、座右の書にしたいもの一つに、森有正全集 全14巻 補巻1 筑摩書房があります。大好きな思想家のひとりです。みなさんもはやく、よき書、よき思想家に出会って下さい。



山田 次良 (栄養学)

からだと食物 吉川春寿著 岩波新書青337

栄養学の歴史を概説し、栄養学をわかりやすく説明している。家政科(家政・食物栄養専攻共)の学生は一読しておいてほしい。古い本(初版昭和34年)なので、分析データなどの数値は新しい本を見る必要があるが、栄養学というものを理解するのに推奨できる。家政科以外の学生にとっても栄養学を通して経験科学の考え方を理解するのに役立つ本である。

物理学とは何だろうか 上 朝永振一郎著
岩波新書黄85

ノーベル賞受賞者の著者が物理学発展の歴史を述べながら、自然科学の考え方をまとめた名著である。内容には難しい点もあるが、栄養学より方法論的にしっかりしている物理学が対象だから、自然科学の考え方を理解するのに適している。人類の文化には「宗教」・「文学」・「芸術」など、いろいろな分野があるが、「科学」もその一つで、文学などを志す学生にとっても、物質の世界を理解するために人類が築いた文化である「科学」の考え方を理解することが必要であろう。

科学の哲学 柳瀬睦男著 岩波新書黄260

科学の考え方を理解するのに「考え方」そのものを説明した本の方が読みやすいと思われる学生に薦める。著者はカトリック司祭、上智大学長である。講義録なので厳密性を欠く点もあるが読みやすい。(新刊)

エントロピーの法則 ジェレミー・リフキン著
竹内均訳 祥伝社

エントロピーと工業社会の選択 河宮信郎著
海鳴社

科学技術文明のあり方、限界というような問題をとりあげたものとして「エントロピー」という語が話題になっている。読んでみるのも面白い。物事にはいろいろな見方があるのだから、本を批判的に読む訓練も必要である。

川端ひろ子(体育)

人間は誰でも健康で幸せに長生きすることを願っている。小野三嗣著 健康をもとめて 1-6 不昧堂新書 は「健康とは自らの責任で管理するものだ」との考えを根底に、乳児期、幼児期、児童・思春期、青年期、壮年期、老年期に分冊し、加齢とともに変化する身体の実態とその段階に適する運動のあり方を科学的な資料を基に、歯切れよく著述している。

「人体の奥にひそんでいる生きる力のもとをひき出し、それを助長させること」(自然良能)を主眼にしているのが長谷川光洋著 身体均整の科学—矯全体育— 新星出版社 である。自然良能を充分発揮させるためには骨格、筋肉を正常に保つことであるとし、それらの歪みからくる障害、その矯正方法について、現代科学と東洋医学の利点を取り入れて著述している。

人間の運動を錐体外路系の無意識運動と錐体路系の意識運動の2つの重なりによって行なわれているが、「意識運動が優勢であるがゆえに心身のバランスを崩している」と述べているのが野口晴哉著 健康生活の原理—活元運動のすすめ— 全生社 である。この書を知り実践して約1年、身体内をエネルギーが淀みなく流れ、その延長として自然界、宇宙界と交流しているような気がする。私の身体観は大きく変わった。この書はまだ図書館にないが早急に入れよう。

座右書をも兼ねて印象に残った本としては、倉林正次編 日本まつりと年中行事事典 桜楓社 全国の主な祭りと行事を、あいうえお順に解説し、また月日別にまとめて主催、所在地、電話番号を明記し、さらに都道府県別に無形文化財を別記してある。人づてに、農民の間に伝承されている「黒川能」というものがあることを聞いていたが、この事典でそれを確かめ5月3日山形県鶴岡市の片田舎で5時間にわたる大らかな奉納能を無事に観ることができた。

梅原猛著 日本の深層—縄文・蝦夷文化を探る— 佼成出版社 原日本文化に対する考えを

「繩魂弥才」とし、アイヌ語から日本古代語が発展したと述べている。

後藤 平吉(法学)

概説書に名著なしといわれるが、例外もある。田中耕太郎著 法律学概論 学生社 はその一つである。日本の学者の書いた法律学の概論で、水準の高さ、詳細さ、格調の高さにおいて未だこの本の右にでるものを知らない。分りやすく正統的なものとしては、伊藤正三著 法学 有信堂高文社 が勧めうる。

一般にわが国の社会科学に関する本には、思想の欠落したものが多い。その中で、社会福祉に関するものでは、嶋田啓一郎著 社会福祉の思想と理論と社会福祉体系論 どちらもミネルヴァ書房 をあげたい。

政治学に関する近著としては、京極純一著 日本の政治 東京大学出版会 がすぐれており、近年における大きな収穫といえる。思想的に深く、文明論であると同時に日本論でもあり、読みものとしてもおもしろい。

思想的なものとしては、エーリッヒ・フロム、ラオドール・ボヴェー、ポール・トゥルニエあたりがよい。フロムの割合新しいものとしては、TO HAVE OR TO BE (日本語訳 生きるということ 紀伊国屋)、トゥルニエの Apprendre à vieillir (日本語訳 老いの意味)、Die Jahreszeiten Unseres Lebens (日本語訳 人生の四季 ヨルダン社)があり学生向き。

キリスト教に関するもので、深みのある本としては、M・Eボイルンの This Tremendous Lover (日本語訳 すさまじき愛 中央出版社) アンドレ・ルーフ Les conférences données (日本語訳 聖書を祈る あかし書房) は得難い名著。

ボヴェーのものは結婚や性に関するものが特にすぐれている。

日本ぐらい、自分が本当にわかっていないことについて論じている人間の多い国はないと思う。ちゃんとした人の書いた、ちゃんとした本を選ぶこと。

鈴木 智子 (国語学)

長崎のクリスチアン

去年の春、長崎、五島に巡礼する機会に恵まれ、千人以上ものクリスチアンがここで殺されたという西坂の丘に立って、日本に教会が立てられるために、どれほど多くの犠牲が必要であったかをあらためて思いました。この巡礼がきっかけとなって、帰ってから時間の許すごとに読みたくなるのは、長崎のクリスチアン関係の本でしたが、今その中から印象に残っている7冊をあげてみたいと思います。

- ①長崎の殉教者 片岡弥吉著 角川選書33
- ②守山勘三郎の覚え書 パチェコ・ディエゴ著
二十六聖人記念館
- ③小さな島の明治維新 若城希伊子著 新潮社
- ④ある明治の福祉像 片岡弥吉著 NHKブックス
- ⑤長崎の天主堂 パチェコ・ディエゴ著 西日本文化協会
- ⑥お告げのマリア 小坂井澄著
- ⑦ばんばのつぐやき 今井美沙子著
サンブライト

ここに掲げたものは、日本のクリスチアン史の全貌を語るものではありません。その中の一こまにスポット・ライトを当てて描いたものばかりです。①は長崎地方の250年にわたるクリシ

タン弾圧の歴史をまとめたもの、②はその中で信仰を守っていくにはどう生きなければならなかったかを、守山甚三郎というお百姓が素朴な筆で書き綴ったメモです。③はこの潜伏時代に水方の家に生まれ合せ、父親の役職を継いで水方にならなければならないことを苦悩しながらも、一人の立派な水方に成長していくドミンゴ森松次郎の生涯を描いた作品です。④は禁教令が解かれた直後に来日し、迫害に疲れ、貧困のどん底にあえていた長崎地方の信者たちの良き父となったフランスの貴族ド・ロ神父の生涯を記したものです。

長崎・五島方面の庶民生活の中に深く根をおろしているカトリックの信仰は、①に描かれているような信仰の姿を見、②③④に代表されるようなよき司牧者たちを得、何代もかかって、はぐまれてきたものなのだろうなずかれました。それは⑤に見られるように生活と密着した美しい祈りの家と、⑥にみられるような働き手とを生み出しました。そして⑦に描き出されるように、この地方の人々の生活の根底に浸透していったのです。

これらの中で、一番私が感動して読んだのは守山甚三郎の覚え書でした。小さな版のわずか20ページを埋めるだけの、しかも途中で終わっているこのメモは、信仰の自由な時代に、安穩と信仰生活を送っている私の心をゆさぶる力を持っていました。独学でようやく覚えた文字を使い、浦上の方言ひとつひとつと綴られるこの記録を、皆さんも一度読んでごらんになりませんか。神様を真剣にみつめる魂の安らかさと強さが静かに伝ってくるメモでした。



海外記

ちよっと見のブラジル

青木正次 (国文学)

ブラジルはサンパウロでの一年間の生活を支えていたのは毎週路上で開かれるフェイラだった。これは主として食物市であり、その他雑貨類や怪しげな薬物などもあったが、これが週に少くとも一度は同じ路上で年中開かれて、人々は(大体が女性だが)手引車の小さいヤツを曳いて、3日分の食料をそこから仕入れて帰るのである。僕の住んでいたアピリオソアレス通りの高層アパートに囲まれた地域でも、金曜日の午前中に一つと、数町下った通りと数町上った坂上(サンパウロは坂の町だ。雨が降ると路上駐車車のフェルクスワーゲンが流される)の二ヶ所でも曜日を違えて開かれ、都合週に三回、この市が開かれていた。

食料は生鮮食品はこのフェイラで、その他主食のパン(日本の食パンではなくて、パオンジーニョというフランスパン風の小さいもの)を含めて干物などもスーパーメル

カード(スーパーマーケット)が出てきて、そこで買い入れるようになっていく。ちなみにデパートというものは規模が小さくて衣類ぐらいしか売っていない。"シアーズ"というアメリカ資本のデパートが南米各地にあったが。

フェイラで売っているのは、というより店を出している小商人は順番どおりに行くと、路の両側には同じスタイルで並んでいて、まずは魚屋が二軒、ナマズ・ドラド(黄金の魚)・マグロから鯛・スズキ・イカ・ハマグリにいたるまで板の台上に放り出して威勢よく客を呼んで売っている。その向い側は馬鈴薯を大きさに分

けて計り売りをする父娘がいた。その隣りが卵屋で向い合って二軒。一人はイタリア系ブラジル人のおばさんでもう一軒は日系人の二世夫婦。そして肉屋が続くが、これは日よけテントの下にのれんのように豚の足をズラリとぶら下げてあり、主として牛肉と鶏肉をドンとかけ並べてある。(豚肉は高くて、あまり好まれない。豚の足やシッポ、鼻などをブラジルの代表的土俗料理フェジョアダに入れる。これは強烈で、ウマイ豆とのゴツタ煮)。そして野菜と果物の店がずらりと並び、パパイヤやバナナの匂いが流れてくる。というふうにあげていけば一軒一軒思



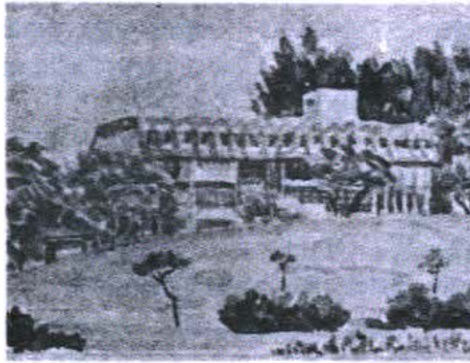
PADARIA

い出せるくらいによく通った。若い中国人夫婦の干物屋で買う納豆や豆腐、するとすぐにニラやショウガのおまけをくれる商売上手。バナナ屋のおじさんははにかみ屋のポルトガル系ブラジル人で、必ずバナナをむいて一本ずつ渡し、食べさせてから、

どうかと聞く。オレンジ売りの兄ちゃんは僕らがミック・ジャガーと名づけていた陽気で、売り声の良い男。会うといつも何か話しかけてきて、よく切れるナイフでオレンジをさっと切って汁のしたゝるまゝにさし出してくれる。などなど。

ところでフェイラの話をもち出したのは、これがどうもブラジルの社会や文化の底辺をよく示しているように思えて楽しかったからだ。朝6時ごろトラックがやってきて、住宅街の道路にアットという間にテント張りの店を張り並べ、正午にはまた風のように消えてなくなる。すぐ

市の清掃車がきて掃き流し、すぐに静かなRua（街路）に戻る。さっきまでの賑やかな雑踏が何だか夢の中のように思えてくる。レモンの入った網をかかえてしつこく売っていた黒人少年や同じ仲間が買物車を運んで少々の金をもらう仕事に精を出していた、あの彼らの生活ぶりは影のように強い日射の中に消えてしまっている。今ははゞ値段表が商品につけられているが、それも年に120%のインフレの中では、どれだけの意味があるのか、しかもそれが案外バラバラで安いのも高いものもあるし、値切ったり、笑いかけたり（特に女性がすれば）して値がすぐ上下するのだ。商売の上手な中国・韓国人のすぐ隣りに、売れても売れなくても関係ないといった顔で客を眺めているだけの果物売りのブラジル人もいる。彼のところで売れたのを見たことがなかった。品物もダラシなく放り出してあるだけだ。高



サンパウロ大学 (USP) 人文科学研究所

く吹っかける奴もいるし、日本商社員の奥さんとみれば、高い品をより高く売りつけるのは得意といった闊市空気が自由に流れている。

むろんスリ・ひったくりも居るといふ。よく取られた話をきいた。財布は嚴重に内ポケットに忍ばせ、絶対にハンドバッグや肩かけのバッグはダメともいふ。でも平気でそうしているオシャレな女性もずいぶん見た。僕は買物分の札を裸でジーンズのポケットに分散して入れていたが。

南米各地で、アンデスの山中の町でも、このフェイラをみて買出しもして歩いたが、これが都市の原型としての〈市〉であり、そして市はもっともワイ雑で自由な、今や日本戦後神話になり果てた〈闊市〉と同じ、都市世界の中心であることは明らかだ。サンパウロのような南米随一の大都市で、近代的な経済的時間や空間が自在に入りこんで、大企業の資本で埋もれてし

まっているのではないかと思える場所に、毎週それこそコツ然と現われ、活気あふれる人種と階層のゴッタ煮的な雑踏を作りだし、そして白昼陽が昇ると一瞬にしてどこかヘトラックと共に消えていってしまい、あとは水で洗い流された道路の湿り気しか残らない、といった風景の激変が維持されていることに、驚いたのだった。

生活の上層に近代的な経済的諸ルールが整然と敷かれていながら、すぐその下にはこういうフェイラ的な自由と緊張の時間や空間が流されている。近代化が一斉に生活の質を前進運動に変える単一化を条件にしていると考えれば、ブラジル知識人が嘆いてみせるように、彼の地は近代化していないのだが、果してそうか。管理的な統一やデパート的良識ではなくて、アナーキーな乱雑が都〈市〉の本質だとすれば、互いに仮面をかぶりながらのダマシダ

マサレながら緊張しつつ、行きずり同士のレンタイも成り立っているようにみえた、フェイラの暖かみを、市の行政上も残しておくやり方のほうが居心地がよい。

サンパウロ大学の空気も、まさしくフェイラ風で、大学教授たちのペテン市の間を、通りすがりの学生が面白そうにヒヤカして歩く、といった感じで、オモシロかった。豪華建造物の間でとくに文学部は建物からして、学生アパートにいつ変わるかもしれぬ代物で（実は教室が学生寮を流用していた）、正札なしの掛値で知識を売る作業にはもってこいの空気だった。そういえば学生は素見ぞめきにふさわしく全員、職業人で、授業料などはタダだったっけ。

（スケッチも青木先生）

* * * NEWS * * *

寄贈図書紹介

昭和58年度文学部英文学科、国文学科、並びに短大英文科卒業生の皆さんから、下記の図書が寄贈されました。

- ・井上靖歴史小説集 全11巻 岩波書店
- ・円地文子全集 全16巻 新潮社
- ・庄野英二全集 全11巻 偕成社
- ・芭蕉語彙 宇田零雨著 青土社
- ・研究社新英和大辞典 研究社
- ・研究社新和英大辞典 研究社
- 小川和枝氏（昭和41年文学部国文学科卒業）からは下記の資料が寄贈されました。
- ・平治物語絵巻一三條殿夜討巻・信西巻・六波羅行幸一3巻 講談社（巻物）
- ・ラファエル素描集 岩波書店
- ・ラファエルの壁画 岩波書店
- ・画帖桂離宮 岩波書店
- ・講演：小林秀雄氏 信ずることと知ること（レコード）

卒業生に吉報

今年度より貸出が出来るようになりました。

1人 3冊 1週間

カウンターに借用願書を用意してあります。

夏休みの予定

例年どおり7月16日から8月31日まで休日開館となりますが、期間中に蔵書点検作業などのため休館があります。詳しくは掲示板でお知らせします。

貸出時間延長 一開館時から閉館時まで一

月一金 9時～17時30分
土 9時～15時30分
休業日 9時30分～16時

但し一夜貸出の時間は従来通りです。

新年度から相互利用がより具体化

本学が加盟している日本カトリック大学連盟の申し合せにより、加盟大学の図書館の閲覧利用が可能になりました。その対象校は、

- 清泉女子大学
- 聖心女子大学
- 白百合女子大学
- 上智大学
- 南山大学
- ノートルダム清心女子大学
- ノートルダム女子大学
- 英知大学
- 神戸海星女子学院大学
- エリザベト音楽大学
- 藤女子大学

各館の発行する“共通閲覧証”をもって利用が出来ます。調査案内カウンターで取扱います。利用の際は、利用館の規則に従って下さい。

館職員の異動

退職 奉仕部 高橋 園子
採用 奉仕部 戸村 倫子

